

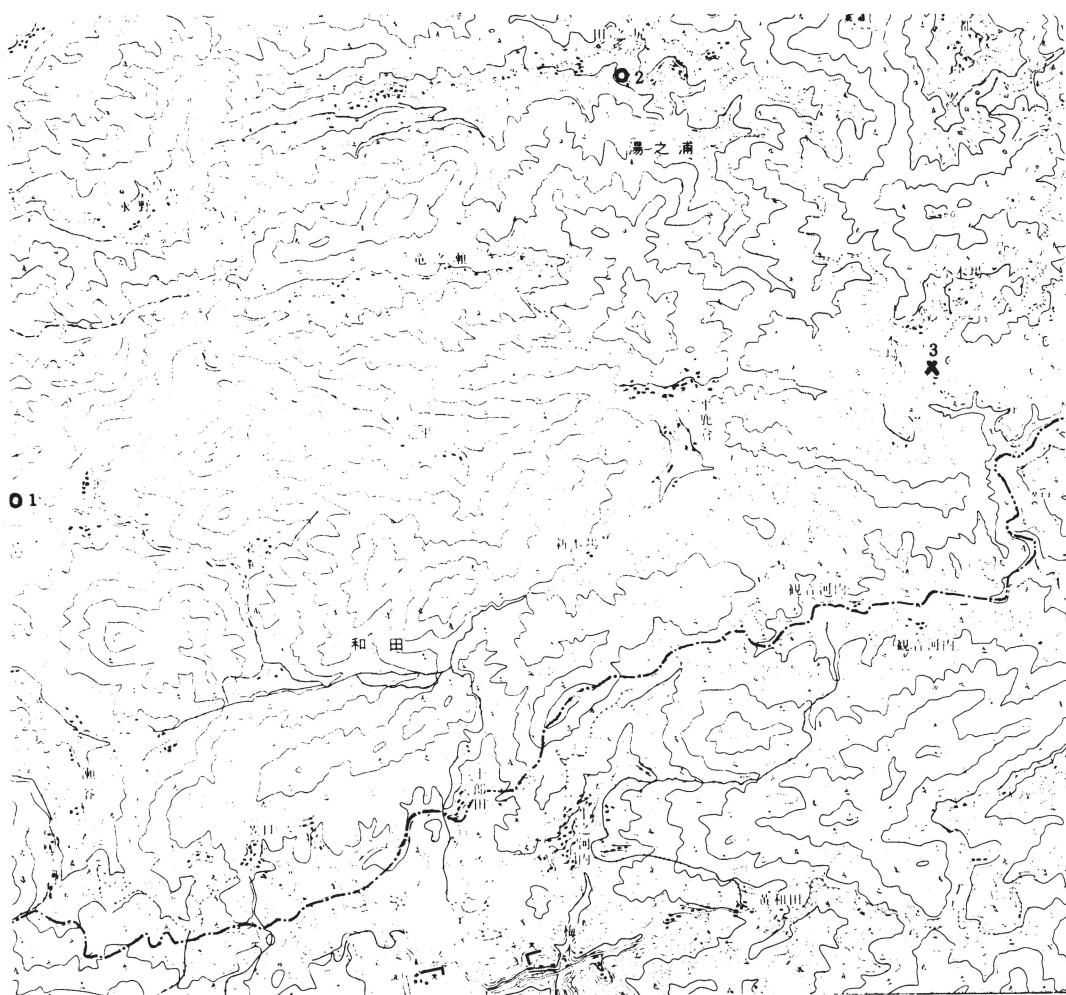
吹上町今木場遺跡の石器について

池 畑 耕 一

今木場遺跡は、日置郡吹上町今木場にあり、今日まで発掘調査はされていないが、表面採集により多量の石器が採集されている。それらは『九州考古学』^①、『吹上町郷土史』^②、『ふきあげ』^③などに紹介されている。この遺跡は、縄文時代早期から前期にかけてのものであり、その石器組成には注目されるものがあるので、ここに紹介し、特殊石器について論及してみたい。

1. 位置・地形(第1図)

薩摩半島は、東側が急傾斜で鹿児島湾(錦江湾)に落ち込み、西側はゆるやかに東支那海へさがり、その中央部には標高400mほどの低丘陵が南北に連なっている。西方には、日本三大砂丘のひとつである吹上浜砂丘が、約40kmにわたって広がり、当遺跡は、海岸線より約11kmはいった所、薩摩半島のほぼ中央部に位置する。四方を山に囲まれ、南北方向に長い帯状の盆地上、標高



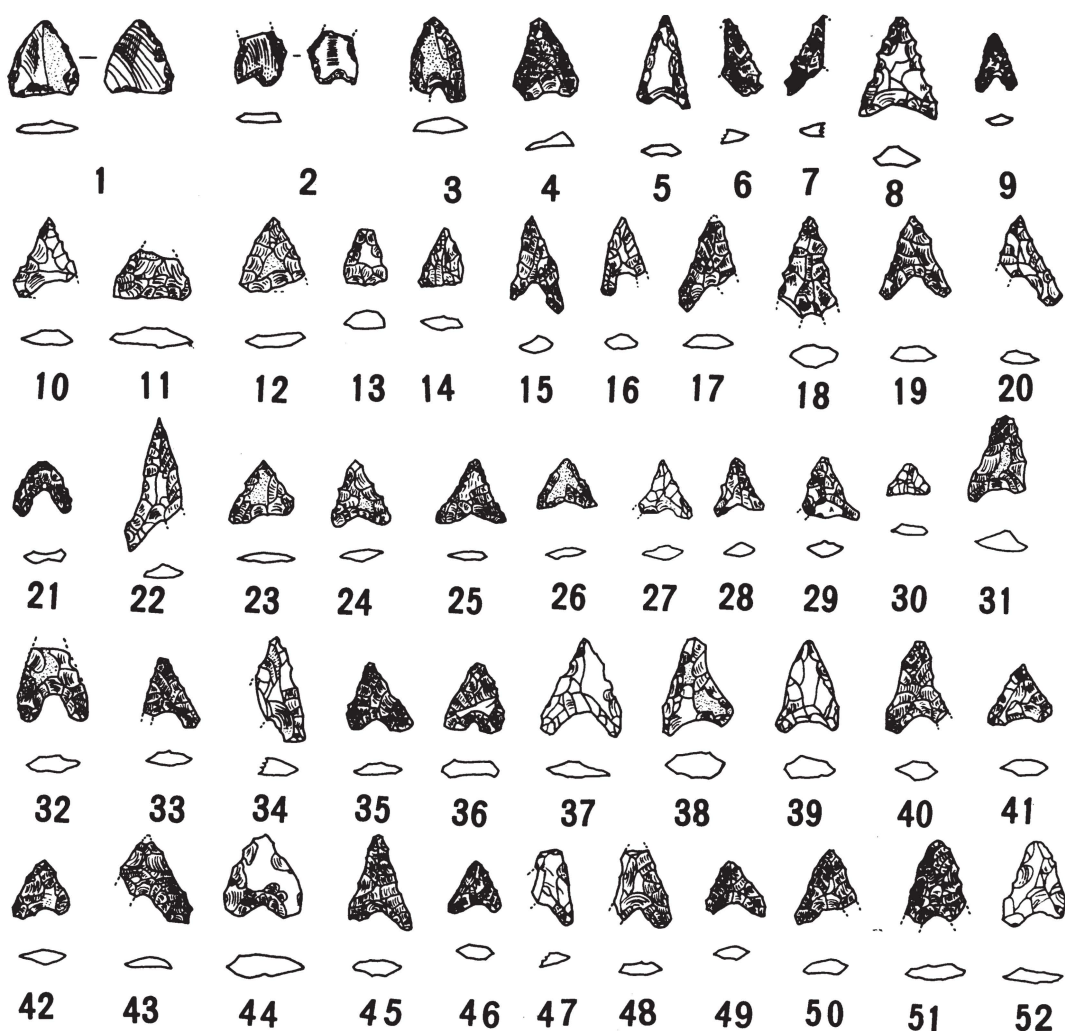
第1図 周辺地形

1、塩水流遺跡 2、田之尻遺跡 3、今木場遺跡

320 m のところにあり、南側は段々畑になって上昇し、西側は逆にさがっており、最低部には吹上浜に注がれる伊作川の源川が流れている。鹿児島市との境界付近にあたり、バスも通わぬ辺地で、平鹿倉小・中学校が約1.3km西にある。

周辺の遺跡には、縄文時代早期～前期の大坂遺跡（金峰町大坂）^④、縄文時代後期の田之尻遺跡（吹上町湯之浦田之尻）^⑤、縄文時代晩期の北湯之元遺跡（吹上町湯之元）^⑥、縄文時代前期・晩期の塩水流遺跡（吹上町塩水流）などがある。また、筆者は円形石器を、北湯之元から平鹿倉に行く途中の道端で捨てたこともあり、今木場周辺には縄文時代の遺跡が、まだ多く眠っているものと思われる。

遺物は、平坦な畑地から採集されており、その広さは7000㎡にも及ぶ。畑地から、西方にある川までは段々の畑あるいは水田となっているが、この段々畑からは頁岩製剝片を1片採集したにとどまった。この台地の一端が、住宅建築のためカットされており、その断面で層位の観察ができ



第2図 石鏃（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）

第1表 石鑛計測値(単位: 釐)

類	石 質	長 さ	最大幅	厚 さ	えぐりの深さ	最大幅の位置 (基部より)		類	石 質	長 さ	最大幅	厚 さ	えぐりの深さ	最大幅の位置 (基部より)
1	黒 曜 石	19	16	3	0	3	28	7	安 山 岩	14	12	3	3	0
2	"		11	2	2		29		"	14		4	1	0
3	1		22	14	3	4	30		サヌカイト	8	10	3	0	0
4			20	16	3	2	31			22		6	3	0
5		安 山 岩	23	13	3	3	32		安 山 岩		17	4	7	2
6		黒 曜 石	19		3	5	33	8	黒 曜 石	18	15	4	4	2
7	2	"	20		3	7	34		サヌカイト	26		5	5	0
8		サヌカイト	25	19	5	3	35		黒 曜 石	18	18	4	4	2
9		メ ノ ー	14	10	2	4	36		安 山 岩	18	15	4	3	1
10		サヌカイト	20		3		37		サヌカイト	24	19	4	6	2
11	3			19	5	0	38	9	"	24	17	7	3	2
12			19	17	3	0	39		"	23	15	5	3	1
13			14	11	5	0	40		黒 曜 石	24	17	5	5	1
14		砂 岩	14	11	4	0	41		安 山 岩	15	16	5	2	0
15	4	黒 曜 石	24	13	5	8	42		黒 曜 石	14	13	3	3	1
16		サヌカイト	19	12	4	5	43			22		3	7	3
17			25		4	7	44			21	19	7	4	3
18					6		45			25	16	3	5	0
19			20	17	4	6	46			13	13	3	2	0
20			22	19	3	7	47			19		3	6	1
21		黒 曜 石	13	14	3	7	48					3	5	2
22	6	安 山 岩	33	18	3	8	49			14	16	4	4	0
23		粘 板 岩	15	16	2	2	50			18	17	4	3	0
24	7		17	15	3	3	51					4		
25			16	17	3	3	52		安 山 岩	22	16	4	4	0
26			12	15	2	2	合計			876	594	196	184	
27		安 山 岩	15		3	2	平均			19.0	15.2	3.8	4.3	

る。部分的には、かなり傾斜あるいは凹凸がみられるが、大ざっぱにみると、表層にうすい耕作土があり、その下に約40cm幅の褐色ローム層、約10cm幅の茶褐色ローム層、約35cm幅の黄褐色パミス層、約50cm幅の茶褐色土層、約30cm幅の白っぽい褐色土層とつづき、その下は礫になっている。断面からは1片も採集されていないが、遺物はパミス層より上の褐色ローム層(Ⅱ層)あるいは茶褐色ローム層(Ⅲ層)の中に含まれていたものと思われる。

2. 遺物

[土器]

本遺跡の特色として、石器・石片に比べて、土器の出土が極度に少ないことがあげられる。発掘調査の行なわれていない今日、これらについて断定したことはいえないが、表面に出た土器が長い間に磨滅したとも考えにくいし、あるいは石器製作工房の場所ではなかろうか。数少ない工器には、C式・山形押型文・穀粒押型文・首畑式・塞之神式がある。

[石器]

石材には、黒耀石・安山岩・粘板岩・砂岩・めのう^⑦があり、量的には黒耀石・安山岩が圧倒的に多い。安山岩の中にはサヌカイト(讃石)も含まれている。

① 石鏃(第2図1～52・第1表)

すべて打製無茎石鏃であり、これらは形態・製作技法から9種類に細分できる。

第1類 大剝離面を大きく残しているものである(1～5)。

第2類 稜線の凹凸が大きいもので、サメ歯形、あるいは鋸歯形といわれるものである(6～9)。

第3類 基部が直線、つまり平基式のものである(10～14)。

第4類 えぐりの深い長脚鏃的なものである(15～20)。

第5類 鋤先形石鏃である(21)。

第6類 八角形を呈するものである(22)。

第7類 えぐりの部分が直線状になったものである(23～31)。

第8類 鋏形鏃といわれるものである(9・16・20・32～36)。

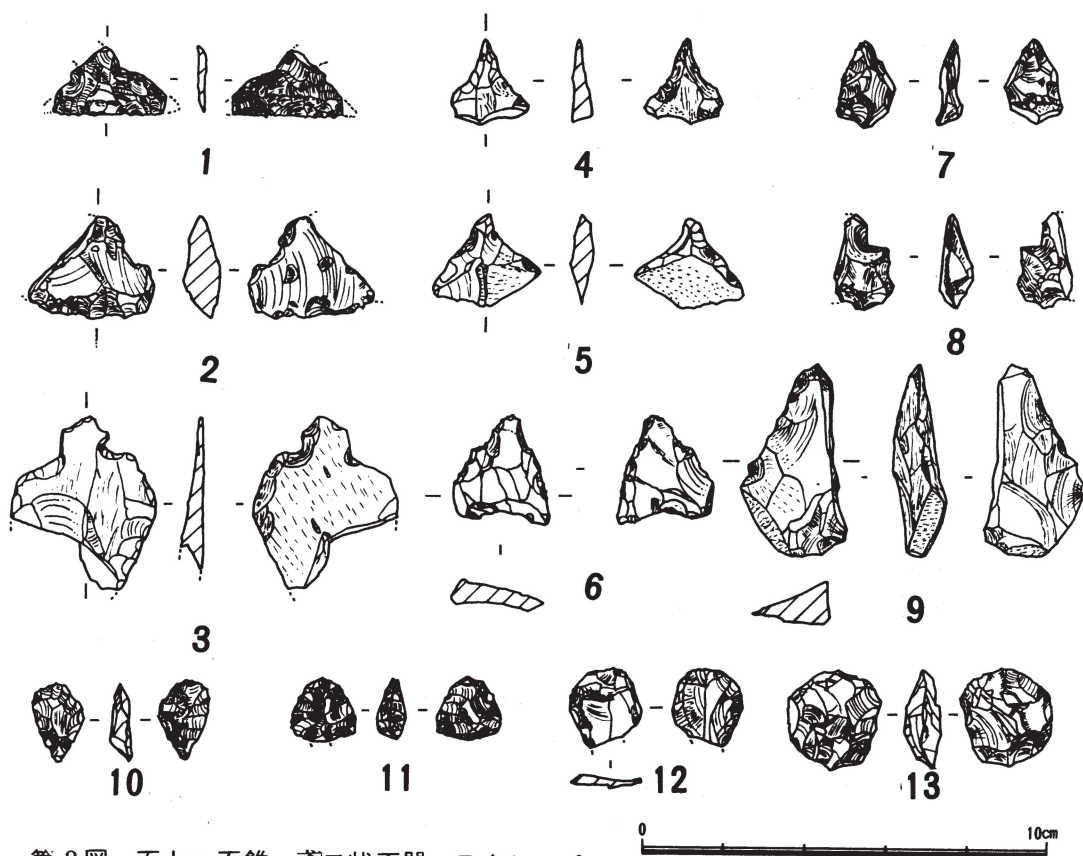
第9類 えぐりの部分が広がり、弧を描いているものである(37～52)。

これらの計測値および比率は、第1表のとおりである。これを縄文時代晩期の上加世田遺跡^⑧(加世田市)と比較した時、その相対比にいちじるしい違いがあらわれる。つまり、長さとの相関係数は0.58(上加世田遺跡は0.45)、長さといぐり部分の長さの相関係数は0.57(上加世田遺跡は0.39)と、上加世田遺跡の石鏃より形が整っていることを示している。また、凹基式と平基式との比は88:12で、上加世田遺跡では76:24であった。

② 石匙(第3図1～3)

横形のもの(1・2)と縦形のもの(3)とがある。1は黒耀石で刃の両端および舌部を欠いている。全面に細かい剝離が施されているが、使用痕はみられない。2は黒耀石製であるが、未製品である。刃部には、押圧剝離が施されているが、全体的に部厚くつくられ、片面は大剝離面に、一部押圧剝離痕をみるのみである。3は安山岩製で、縦形ながら横広のものである。刃部の一部を欠いている。二面とも、大剝離面を残し、縁辺部のみに、ていねいな押圧剝離が施されている。

上村・出口両氏は前記報告で『石匙は、黒耀石製のは柄部が一方に遍しているのに対し、安



第3図 石七・石錐・鳶口状石器・スクレーパー

山岩質の柄部は中央にある。』と書かれているが、この3点でもそれが当てはまる。また、形態に対する石材選別も考えられそうである。

③ 石錐（第3図4～8）

棒状のものではなく、すべて柄部が広がり、刃部の短いものである。4・5は、安山岩製で基部を除いて、細かい剝離が縁辺に施されている。6は頁岩製、7・8は黒耀石製であり、両面から加工されているが、刃部が広く、錐でなく、あるいはナイフみたいな用をしていたかもしれない。

④ 鳶口状石器（第3図9）

サヌカイト製で、一方の側面のみに刃がつけられている。一見、石槍の半欠みみたいであるが、先端の加工がみられないことからして、側面の刃を使い、ナイフのように使っていたものと思われる。

⑤ スクレーパー（第3図10～13）

10・11は黒耀石、12・13は安山岩製である。10は両面とも全体に細かい剝離が施された部厚のものであり、一方のほうは細く延び、片方は幅広くなっておわっている。あるいは錐かとも考えたが、他の錐では基部にほとんど細部加工がみられず、これのみにみられることは、これが幅広のほうを刃とした削器なのであろう。細いほうは柄部であろうか。11は、先端のとがった三角形を呈しており、ていねいな細部加工がみられる。基部には折れた痕跡をみるが、柄があったのか否かは明らかでない。厚みもあり、搔器と思われる。12は基部を欠いているが、薄いつくりで

両面とも縁辺のみに細部加工が施されている。13も一方を欠いており、あるいはつまみが付いていたかとも思われるが、両面とも全体に細部加工がなされている。部厚である。

⑥ 片刃石器(第4図14~17)

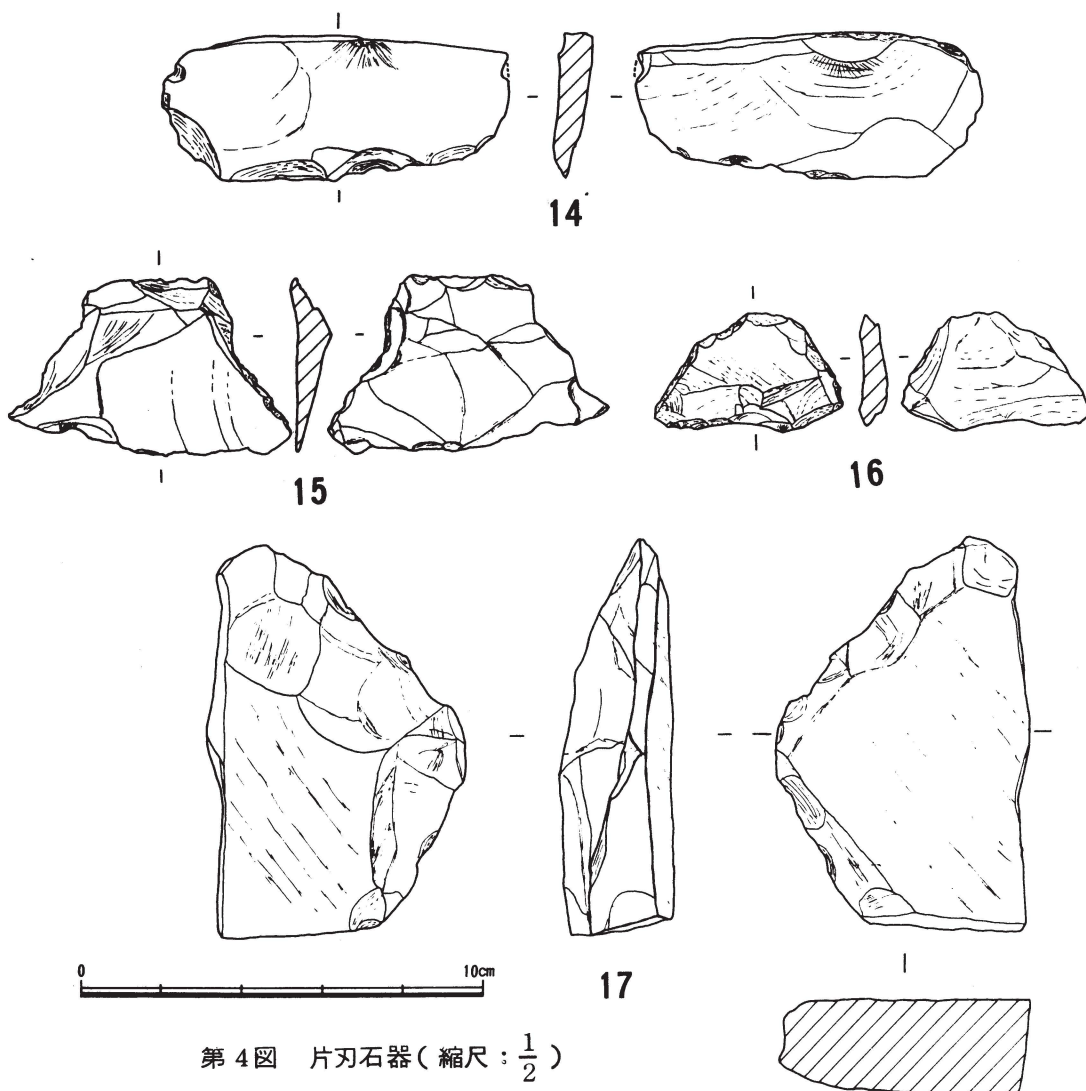
14~16は安山岩製であるが、磨滅が激しく、加工痕の不明な所もある。14は横剥ぎ剥片を使い、一方は自然面を残し、刃部のみに細部加工を施している。17は砂岩製のもので、四辺のうち一辺のみに刃をつけている。全体に部厚で、重量感のあることより、叩き切るような用を足したものであろう。

以上のほかに、多量のフレイク・チップがみられる。

3. まとめにかえて

鹿児島県の縄文時代の石器については、今日まであまり言及されていないように見える。ここでは縄文時代早・前期の石器組成と拇指状撚器について、若干のまとめを行なってみよう。

まず、今木場遺跡の石器にはどのようなものがあるか、上村・出口両氏報告の分もあわせて整理してみよう。石鏃・石匙・石錐・鳶口状石器・スクレーパー・片刃石器・三日月形石器・打製石斧の



第4図 片刃石器(縮尺: $\frac{1}{2}$)

第2表 縄文時代早・前期の石器出土地名表(1)

	遺 跡 名	所 在 地	土 器	石 器
1	前 平	鹿児島市吉野町雀ヶ宮前平	前平	ノミ形磨製石斧 モリ形磨製石器
2	丸 岡	〃 坂元たんたとう丸岡	石坂	石皿
3	南 州 神 社	〃 上竜尾町南州神社	前平	石鏃・石匙
4	塔 之 原	〃 五ヶ別府塔之原	押型文	石斧
5	耳 原	額娃町別府耳原	塞の神	石斧・石鏃
6	雪 丸	〃 上別府雪丸	石坂・吉田	石皿
7	洩 別 府	〃 牧の内洩別府	吉田・塞の神	石斧・たたき石
8	北 手 牧	〃 上別府北手牧	押型文・轟・前平・曾畑 春日	石鏃・石匙(横形)・スクレーパー ・打製石斧・たたき石
9	富 岡	枕崎市西鹿籠富岡	轟	石鏃・打製石斧
10	岩 崎	〃 〃 岩崎	轟	石鏃・打製石斧
11	上 鳥 越	〃 〃 上鳥越	燃糸文	石鏃・石小刀
12	俵 積 田	〃 別府俵積田	塞の神	石鏃
13	小 園	〃 東鹿籠小園	日勝山	石鏃
14	石 坂 上	知覧町永里石坂上	押型文・石坂・塞の神	石鏃・石斧
15	和 田 前	〃 〃 和田前	押型文・塞の神	石鏃・石匙
16	永 野	〃 〃 永野	前平	石鏃
17	登 立	〃 塩屋大隣登立	押型文・塞の神	石鏃
18	阿 多	金峰町上焼田	轟・日木山	石鏃・石匙
19	上 焼 田	〃 〃	轟・春日・塞の神	石鏃・石匙・石錐・打製石斧・ 磨製石斧・剝片石器
20	黒 川 洞 穴	吹上町坊野	曾畑	石鏃・石匙(縦形・横形)・ ドリル・スクレーパー
21	小 原 迫	松元町上床小原迫	押型文・貝殻条痕	石斧・石皿
22	東 昌 寺	〃 直木宮田	押型文・貝殻条痕・曾畑	石鏃・石斧・たたき石
23	荘 貝 塚	出水市上大川内荘	轟	スクレーパー状石器・有茎石鏃
24	郷 田	〃 〃 上場	轟B	石鏃・石斧
25	仲 保 木	〃 〃	押型文	石鏃
26	狸山第2地点	〃 〃	山形押型文・燃糸文・轟	細石刃・石鏃
27	〃第3地点	〃 〃	山形押型文・燃糸文・曾畑	細石刃・石鏃・スクレーパー 局部磨製石斧
28	牟 田 尻	〃 武本牟田尻	押型文	特殊石器
29	松 木 原	大口市羽月鳥巢松木原	押型文・轟	石鏃
30	手 向 山	〃 〃 手向山	押型文・轟	石鏃・石匙・石斧・石弾

	遺 跡 名	所 在 地	土 器	石 器
31	提 原	大口市羽月下殿提原	押型文・塞の神	石鏃
32	木 崎 原	〃 大口牛尾木崎原	押型文・竊・塞の神	石鏃・石匙・石斧・石弾
33	永 山	〃 山野小木原永山	押型文・竊・出水・永山 塞の神	石鏃・石匙・石斧・石弾
34	星 ケ 峯	〃 青木星ヶ峰	押型文・塞の神	石鏃・石錐・石匙・砥石
35	塞 の 神	菱刈町下市山塞の神	押型文・塞の神	石鏃・石匙・磨製石斧 石皿・敲石
36	白 坂	〃 田中白坂悪火さあ南	押型文・竊・曾畑・塞の神	石鏃・石匙
37	花 ノ 木Ⅳ	栗野町木場花ノ木	押型文・塞の神	石鏃
38	〃 Ⅴ	〃 〃 〃	平埴・塞の神	石鏃
39	〃 Ⅵ	〃 〃 〃	押型文・石坂・吉田 前平・塞の神	石鏃・削器・凹石・磨石
40	〃 Ⅶ	〃 〃 〃	竊・深浦・平埴・塞の神	石鏃・磨製石斧
41	柿 木 原	〃 中郡柿木原	押型文・竊・曾畑 塞の神・春日	石鏃・打製石斧・磨製石斧
42	牧後謝場平	〃	押型文・撚糸文・竊 曾畑・阿高	石鏃・石皿・叩石
43	上 佐 牟田	〃	押型文・撚糸文・竊 曾畑・吉田	石鏃・石匙・削器・搔器 ドリル・尖頭器
44	西原・肥	〃	押型文・竊・曾畑	石鏃・石皿
45	榑 木 野	始良町木津志榑木野	石坂・吉田	磨製石斧
46	広 木	蒲生町漆広木	塞の神	石鏃
47	石 峯	溝辺町石峯	山形押型文・変形撚糸文 石峯・塞の神	石鏃・スクレーパー
48	竹 山	〃 竹山	吉田	石鏃・石鎗・石斧・石鋏
49	桑 の 丸	〃 崎森字桑の丸	吉田・前平・押型文 平埴・塞の神・竊	石鏃・石匙・打製石斧 磨石・敲石
50	北 園 崩丸	横川町上野北園崩丸	石坂・塞の神	打製石斧
51	出 口	志布志町潤野出口	竊・塞の神	磨製石斧
52	新 地 ノ 上	吾平町上名新地ノ上	曾畑	石匙
53	本 城	西之表市松島本城	曾畑	扁平石斧・石皿・敲石
54	本 立	〃 西之表本立	曾畑	打製石斧・磨製石斧
55	指 辺	〃 現和指辺	曾畑	敲石・磨石・石皿
56	牛 の 原	中種子町曾田牛の原	塞の神・苦浜	打製石斧
57	満 足 山	〃 野間満足山	塞の神	打製石斧・凹石
58	竹 屋 野	〃 〃 竹屋野	塞の神	石匙・石皿
59	女 洲	〃 油久女洲	苦浜	磨製石斧
60	苦 浜 貝 塚	〃 坂井屋久津苦浜	苦浜	石鏃・打製石斧

八種であり、この中では石鏃が圧倒的に多い。これは、他の同時期の遺跡においてもみられることで、特に目新しいことではない。縄文時代前期の遺跡については、最近まで土器編年の研究に力が注がれ、集落としてとらえられた調査が、ほとんどなされていない。したがって、石器組成について良好な遺跡は、ほとんどないが、ここでは表面採集のものも含めてまとめた（第2表・第3表）。

この表でわかるように、石器組成のはっきりした遺跡は数少ない。^⑨吹上町黒川洞穴遺跡は、縄文時代晩期を主体とし、縄文時代早期から平安時代にわたる遺跡であるが、昭和42年夏に行なわれた第4次調査^⑩では、第3層に曽畑式の単純層が検出されている。この層から出土した石器には、石鏃・石匙・ドリル・スクレーパーがある。石鏃は黒曜石製のものが2点あり、ともに小形でえぐりのあるものである。石匙には横形と縦形の両者があり、貝でつくった縦形の匙もある。ドリルは、部分的にしか残っていないが棒状を呈しているものと思われ、一辺を加工した黒曜石あるいは玄武岩でつくられた削器（片刃石器）もかなりみられる。

金峰町上焼田遺跡^⑪は縄文時代晩期・成川式土器も出土しているが、主体となるのは轟式土器で他に春日式・塞の神式を出土する。したがって、石器の大部分は前期のものと思われる。わずか400㎡の狭い調査範囲ながら多量の石器が出土しており、とりわけ石鏃は101本を数える。サメ歯鏃・細石鏃などを含む凹基式がほとんどで、平基式のものが1点ある。石匙は横形のものが6本、縦形のものが1本あり、石錐は三角形を呈するものである。石斧には打製・磨製の両方があり、叩き石も出土している。特に注目されるのは剝片石器で、これはナイフのように使われるものとポイントのように使われるものがある。

栗野町上佐牟田遺跡^⑫は発掘調査が行なわれていないため正確な関係は不明であるが、表面採集でみる限り早期～前期の遺跡と思われる。出土の石器には、石鏃・石匙・削器・ドリル・尖頭器がある。石鏃には平基式のもの、凹基式で長脚のもの、凹基式で短脚のもの、さらには凸基式のものがあり、剝離が整然としていてサメ歯鏃もみられる。石匙には横形と縦形とがあり、量的には横形のものが多い。削器には一辺にのみ押圧剝離のみられる、いわゆる片刃石器が多く、ドリルは末端のふくらむ形態のみである。尖頭器は小形のものである。

次に個々の遺物について若干のまとめをしたい。

石鏃は、狩猟採集生活の中心となる道具であるため多くみられる。剝離が細かく、整然とした形態で凹基の長脚鏃が多いのは、大きな特色である。また、サメ歯鏃や細石鏃のものも目立つ。

石匙には横形のものと、縦形のものとがあるが、これらの比率は資料不足のため定かでない。しかしながら、少なくとも古くから両者が並存することは、石匙の起因にサイドスクレーパーとエンドスクレーパーという租型からの発展^⑬を考えていいのではあるまいか。今後、資料の増加に待ちたい。

石錐は、黒川洞穴・上佐牟田遺跡などで出土しており、形態的には末広がりのものと棒状のものとがある。

早期・前期の石器で特徴的なのは片刃石器である。これは安山岩などの石材を使用し、剝片の一辺に細かい剝離を加えて刃としたものである。形は整然としておらず、まちまちである。

石斧にも磨製のものと打製のものとがあり、出水市狸山遺跡第3地点では局部磨製石斧が出土し

ている。また、種子島ではほとんどの遺跡に石斧の伴なっていることは興味深い。石皿も7遺跡で見られるが、鹿児島市丸岡遺跡^⑭・溝辺町 遺跡^⑮のものは片方に注ぎ口がある。

狩猟・採集生活に依存する縄文時代早期・前期の人々は、武器としての石鏃・石槍、調理用具としての石匙・片刃石器・石皿・叩き石・加工用具としての石斧・石錐などをもって、色々と工夫をしていたことがうかがえる。こうした石器組成のなかで、漁労用具である石錘の出土がみられないのは、網漁の存在を考えるうえに注目される。

スクレーパーのうち、12は拇指状搔器と思われるので、他地域との比較を行なってみよう。

拇指状搔器（サム・エンドスクレーパー）の出土例は、鹿児島県では現在のところ2例目であり、九州でも珍しいものであらうと思われる。これらの類品を求めると、長野県を中心とした中部日本地方の縄文時代早期～前期の遺跡にみられる。^⑯例えば、長野県諏訪市曾根湖底遺跡^⑰は、先土器時代終末期～縄文時代早期の遺跡であるが、石鏃・石槍・錐形石器・鳶口状石器・横刃搔器などとともに、拇指状搔器が出土している。拇指状搔器だけでなく、錐形石器（揉錐器）も、その形態は今木場遺跡のものに類似している。藤森栄一氏は、これらの遺物を縄文時代早期に位置づけている。また、拇指状搔器の使用法については『動物相の変化が、この皮剥ぎ形器具をかえたのだろうか。やがて曾根期には爪よりも小さくなるのは、魚肉または鱗が対象になってのことであらうか。』とする。長野県茅野市米沢北大塩にある駒形遺跡^⑱では、縄文時代早期末（木島式）の住居址が検出され、床面あるいは堆積土中より次のような石器が出土している。尖頭器4、石鏃24、石錐1、拇指状石器6、エンドスクレーパー6、異形石器2、磨石1、凹石1、円盤石3、打製石斧1である。拇指状石器、エンドスクレーパーについては『削器であらう』とし、『この種スクレーパーは片面が平らな剝離面で、これに対応する他面が中高になっている。その一部に細かく剝離を加えて弧状とし、側面観が鴨嘴状をなす類である。』と説明してある。また、円盤石は径1.2cmないしは4cmの円形につくったものであり、拇指状石器、エンド・スクレーパーは黒曜石、円盤石は安山岩でつくられている。

このように、中部地方で発見される拇指状搔器は、そのほとんどが縄文時代早期に属している。

鹿児島県では、出水市郷田遺跡で出土している。^⑲郷田遺跡は、上場遺跡をはじめとする上場高原の遺跡群のひとつで、縄文時代早期に属するが、報告書未刊のため詳細は不明である。

今木場遺跡の石器群は、表面採集の資料であるが、その組成には今までの資料で得られなかったものもある。特に、スクレーパーの使用法については、今後十分な調査をすれば、縄文時代前中期の生活をさぐるうえに重要な糸口を与えてくれよう。今回はドリルとして紹介した8の石器などは、彫器としての用途も考えられる。これらの石器は、石器製作などを考えるうえの一資料と思えるが、今回は資料紹介にとどめ、詳細はまたの機会にしたいと思う。

以上、少ない資料をもとに稿を進めてきたが、今後資料の積み重ねにより、縄文時代早期・前期の生活の一端もしだいに明らかになってこよう。

最後に、この稿のために実測図を提供いただいた上村俊雄・出口浩の両氏、資料提供や有益な教示をいただいた河口貞徳・池水寛治の両氏に深く感謝の意を表したい。

(註)

- ① 上村俊雄・出口浩「鹿児島県今木場遺跡」『九州考古学』33・34号 1968年
- ② 辻正徳
- ③ 久保好実「遺跡その後と新しく見つけた遺跡」『ふきあげ』第8号 1970年
- ④ 註③に同じ
- ⑤ 註③に同じ
- ⑥ 註③に同じ
- ⑦ ガラス質で、うすい桃色を呈しており、あるいは黒耀石かもしれない。
- ⑧ 上加世田遺跡第4次調査の出土石鏃 本を資料とした。
- ⑨ 最近の調査では、鹿児島市加栗山遺跡などに良い資料をみる。
- ⑩ 河口貞徳「鹿児島県黒川洞穴」『考古学ジャーナル』13号 1967年
- ⑪ 出口浩・池畑耕一他「上焼田遺跡」『指辺・横峯・中之峯・上焼田遺跡』（『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』5 1976年
- ⑫ 林昭男・米満重満「栗野町の遺跡について」『鹿児島考古』第8号 1973年
- ⑬ 藤森栄一「縄文中期における石匙の機能的変化について」『考古学雑誌』第49巻第3号 1963年
- ⑭ 河口貞徳「原始時代」『鹿児島市史Ⅰ』 1969年
- ⑮ 河口氏宅で実見
- ⑯ 八幡一郎『日本中部山地に於ける縄文早期文化の研究（上）』慶友社 1972年
- ⑰ 藤森栄一『旧石器の狩人』学生社 1965年
- ⑱ 宮坂英弉『縄文早期終末の住居址—茅野市駒形遺跡出土—』『信濃』13—8 1961年
(註⑱に所収)
- ⑲ 池水寛治氏・牛之浜修氏・長野真一氏に教示を受けた。